

町人権教育研修会・9月28日（月） *83名が出席

自分とは異なる立場や考え方を受け入れることの大切さを学び、共に生きる喜びを感じる。

- ・『カモメに飛ぶことを教えた猫』（ルイス・セプルベダ著、白水社）を通して、小グループで参加者が人権について意見交換を行い、自分自身を見つめる。
- ・弱い立場の人々に、寄り添って生きる地域社会を目指して。

- (1) はじめの会 : 14:00~ ①教育長挨拶
- (2) 全体会 : 14:10~14:50
読み聞かせ公演『カモメに飛ぶことを教えた猫』 ※諏訪中読み聞かせボランティア「Senの風」
- (3) 分散会 : 14:55~16:10 *7分散会
- (4) 終わりの会 : 16:20~16:50 ①参加者の感想発表(3名) ②講師まとめ(林尚之指導主事)



フォルトゥナータ、君のおかげで、ぼくたちは自分とは違っているものを認め、尊重し、愛することを知ったんだ。自分と似た者を認めたり愛したりすることは簡単だけど、違っている者の場合は、とてもむずかしい。…ぼくたちにはそれが、できるようになった。
いいかい、きみはカモメだ。そして、カモメとしての運命を、まっとうしなくてはならないんだ。

林尚之指導主事のまとめ

“Senの風”の皆さんの温かな読み聞かせを心地よく聞きながら、相手のことを思う故の厳しさを感じました。『カモメに飛ぶことを教えた猫』では、猫に愛情いっぱい育てられたカモメが、猫になりたい、と願うのですが、カモメとして育ち、飛ぶことができた時こそが、お互いに本当に幸せになれる時であり、そこには「異なる者同士の愛があったから」だと論じます。

お互いの違いを乗り越えるためには、まず相手のことを知り、共通点を見つけ、ちょっと近づこうとします。その心遣いが喜びを感じ合える絆をつくり、愛となるのかもしれませんが。他の立場の方のアイデアと出会った時、自分のアイデアと組み合わせて、こうするととってもいいアイデアになりそうだ、とひらめいたことはありませんか。歩み寄って、さらに新たな素敵なアイデアを生み出していくことができます。1+1が2だけでなく、3や4にもなっていくのです。そういう経験が学校、家庭、社会で積み重ねられ、その良さを感じた方が周りの方に広げていければ、自分の思いを聞いてくれる社会、一人一人の存在を大切にしてくれる社会に熟成し、みんなが笑顔で過ごせるようになるのではないのでしょうか。



参加者の感想

・読み聞かせ公演は、中学生に分かりやすいようにという思いが込められていたものだっただけに、大人が見ても心に入ってくる内容（テーマ）だった。心に深く染みこんでくる言葉やシーンが多かったし、朗読の方々の読み聞かせもとても良かった。



・読み聞かせでは、ピアノの演奏やセリフの言い回しなどが本当に素晴らしく、お話の世界に引き込まれてしまいました。異なったもの同士が認め合い、尊重し合うことの大切さというのが、とても伝わってきました。

・読み聞かせの良さを改めて感じました。

・公演は非常に面白かった。紙芝居による観賞にとどまらず、原作を読みたいくなる気持ちにさせてもらった内容でした。

・生のピアノ演奏に合わせての紙芝居が、とても素敵だった。カモメを食べなかった猫、あえてタブーを破った猫など。命の継続であり、尊いお話であったと思います。「人権」を考える良い題材でした。

・読み聞かせ、そのものは感動的な内容・発表であり素晴らしと思いましたが、それをもとに「人権」について討議を深めることは若干難しさを感じました。公演内容を現実の世界に引き寄せることに、かなりの隔たりを感じました。

・絵本を題材に人権について考える、という形は、様々な立場がおられる中で、堅苦しくない話し合いができやすいので、この方法を続けてもらえるとうり難いです。

・一期一会、私も支えられて生きている。私の微力で、できることがあるならば、させていただきたいと思う。

・読み聞かせ公演を拝聴し、とても素直な気持ちで作品が心に響きました。子どもたちにとっては、「自分に自信を持つこと」「真剣に取り組むこと」など、カモメの飛び立ちに感動すると思います。大人になった今の自分は、相手にとって何が本当の幸せなのかを考える「愛」に、感動しました。小・中学生だけでなく、大人にとっても、このような内容の読み聞かせの機会は、とても大切だと感じました。

・分散会では、自分とは異なる立場の方と話ができて、皆さんそれぞれの意見があることが分かりました。相手を受け入れて、その気持ちを返していくことの大切さを学ぶことができました。

・いろいろな立場の皆さんの、自由な想いを聞くことができ勉強になりました。

・普段話をする人がいない人たちと席を同じくし、良い出会いとなった。

